

つくばの鳥の思ひ出

一二三朋子

つくばに赴任せしはおよそ二十年前なり。つくばは、街と言へども、賑やかなるは中心部のみにて、それを外るれば、田畑、雑木林のここに点在し、彼方に筑波の紫峰を仰ぐ長閑なる風景廣がりたり。春には田圃より一齊に蛙の聲とよみたり。かくも蛙の鳴き聲かしがましきかと驚きぬ。

つくばには、鳥にまつはる田舎ならではの思ひ出あり。

先づは鶯なり。宿舎より大學までの通勤途中に鶯の聲を聞きし時には、大いに驚きたり。鶯なる鳥は、長野縣などの山奥に生息するものと信じてをりしゆゑ、よもやつくばの街中に鶯の聲聞えむとは思はざりき。

次は、雉なり。住まひの周りの畦道を散策せる折、田圃の中を走りをる雉、しばしば目撃せり。また、ほんの三、四メートル先にて立ち止まれる雉を見し時もありき。田舎なれば警戒心の薄きにや、逃げむとするにもあらで、こちらの存在だに意識せざるが如し。

初めて霍公鳥の聲を聞きしもつくばなり。早朝、「きよきよきよきよきよ」なる聲聞えけり。鶯にも似たるものなれば、當初は鶯かと思ひけり。霍公鳥は鶯に托卵するとのことなれば、自づと似たるものなるか。霍公鳥の聲は、鶯ほど頻繁に聞くことはなかりけり。ごく稀なればこそ、霍公鳥の聲の聞えしときは、聞えずなるまで耳を澄ましけれ。

霍公鳥、『萬葉集』にても百五十三首、鶯よりも多く詠まれをるなり。殊に大伴家持は霍公鳥を愛し、多くの歌を残せり。中にもをかしきは、友人久米廣繩に送りし長歌及び反歌（『萬葉集』四二〇七・四二〇八）なり。久米廣繩の、霍公鳥の鳴きしことを家持に告げて寄こさぬことを恨む歌なり。

四二〇八 我がここだ待てど來鳴かぬ霍公鳥ひとり聞きつつ告げぬ君かも

家持と広繩との親しきが故の戯るるがとき歌、いと微笑まし。

燕は東京などには見かけずなりたる鳥なり。實家のありし板橋區にも、我が幼き頃には軒先に燕の巢ありて、窗よりそつと見上げしこともありき。最近、燕の巢も、燕の姿だに見ること稀になりてぞ久しき。されど、つくばのアパートには燕の巢ありけり。廊下の電灯の傘に器用に巢を作れるなり。數日にて卵の孵り、やがて雛の黄色き嘴、四つ五つ並べり。親鳥、餌の蟲を運ぶ。巢の下には、食べこぼしの蜻蛉などの残骸と糞、夥し。

ある年、隣に新しき住人、越して來たり。その年の春、燕の巢、突如なくなり、綺麗に掃除せられをり。燕、電灯に向かひて飛び來たりては去る。いと哀れなり。恐らく、新しき住人、管理人に清掃を依頼せるらむ。

然れども、二日ほど後、燕、再び、同じところに、泥を啗へ運び、巢を作り始めり。我、即座に貼り紙作りて、アパートの掲示板に貼れり。「燕巢を作り始めぬ。雛の飛び立つまで、皆々俱に見守らむ。乞ふご協力」などやうの文言に、燕の畫を挿し入れたり。また、清掃員

の清掃せし時には、燕の巢を壊さぬやう頼みしところ、かへりて清掃員も喜びてくれぬ。我も巢の下に紙を敷き、汚れの溜まりし折には取り替へなどして清掃せり。

かくして、六月、我が部屋の窓の外を、十數羽の燕、スイスイと飛行して目を樂しませてくれぬ。

つくばを離れて早五年、アパートには今なほ毎年、燕は巢を作りに歸り來や否や。燕たちの無事をこそ祈るばかりなれ。

（令和七年六月二十日受附）